

7) ミツマタ＝三桮

ミツマタはジンチョウゲ科の落葉低木で原産地は中国である。日本では四国、中国地方で和紙の原料を作るために栽培されているが、クワ科の落葉低木コウゾ(楮)や、同じくジンチョウゲ科のガンピ(岩菲)とともに、和紙の原料となる 3 大樹木である。高さは1~2m で枝は3本ずつに別れるところからミツマタの名前がついた。このため三叉とも三枝とも記されている。樹皮は黄褐色で葉は長楕円形、ジンチョウゲとは異なり葉は薄く互生する。晩秋、落葉するときには枝の先に蕾が垂れ下がり、翌春、蕾は立ち上がり、葉の出る前に黄色の小さな筒状花を密集して付ける。別称としてミマタヤナギ、ムスビギなどがある。後者はミツマタの繊維質を利用して、柴、薪、粗朶(ソダ)などを結んだために付けられた名称である(01-04-02 マンサクの項参照)。学名は『*Edgeworthia chrysantha*』で、属名は 19 世紀のイギリスの植物学者 M.P. エドゲウォースの名に因む。種小辞は「黄色の花」という意味で、キクの属名にもなっている。イギリスでは『paper bush』、中国では『黄瑞香』、『結香』とも呼ばれている。

ミツマタが日本に渡来したのは、遣隋使か遣唐使の頃と思われる。製紙技術とともに、コウゾや同じく紙の原料になるカジノキ(梶の木)などと一緒に、輸入されたのだろう。昔から紙を作る原料として重要な樹木で、ミツマタで作った紙は特に丈夫で持ちが良く、虫などが付きにくかったので、大事な書類は『三桮紙』に記されることが多かった。ミツマタが紙の原料として最初に文献に登場するのは慶長 3 年(1598 年)のことで、徳川家康が伊豆修善寺の製紙工、文左右衛門にミツマタの使用を許可した『黒印状』(諸大名の発行する公文書)である。そこには「豆州にては 鳥子草 かんひ みつまたは何方に候とも 修善寺文左右衛門 より外には切るべからず」と記されている。当時は公文書に用いられる紙の原料は許可なく伐採することが禁じられていた。天保 7 年(1836 年)になると大蔵永常が『紙漉必要』を著し、常陸、駿河、甲斐の国でミツマタが栽培されていたことを記している。また同じ頃、佐藤信淵が記した『草木六部耕種法』にはミツマタは紙の原料としては最低で、コウゾと混ぜ合わせて用いることを勧めている。

明治になって紙幣が発行されるようになると政府は当初ガンピの栽培を試みたがうまく行かず、ミツマタ栽培に転換し、明治 12 年(1879 年)以来、三桮紙に印刷されるようになった。偽造されにくかったために、この他にも種々の免許証や証書類などに用いられてきた。現在でも紙幣の原料にはミツマタを用いることが多い。駿河半紙といわれる紙はミツマタで作られており、伊豆や駿河には産地が多く、甲斐の国でも盛んに栽培された。またミツマタは紙幣の原料として不足がちであり、鹿の食害を受けない上に、数年で収穫できることから、杉などよりも効率がよいとして栽培する林業者も復活している。

ミツマタの園芸種には、オレンジ色の美しい花が咲くベニバナミツマタがある。3 月の初めごろから暖かい日にぽつぽつと咲き初めて、花の乏しい季節によく目立つ。庭木としてもなかなか風情があって、陽当たりで比較的湿気の多いところを好む。



ミツマタはジンチョウゲと同じ科に属するが、ジンチョウゲのような香りはない。この植物はもっぱら紙の原料とされ、明治以降は紙幣などを製造するのに栽培された(群馬県安中市)。



紅花のミツマタは庭木としても植えられるほど美しい花を咲かせる(さいたま市浦和区)。



紅花のミツマタ。寒冷地では育てにくいが関東周辺以西の平地であれば、何処でも春を告げる朱赤色の花を咲かせてくれる。やや湿り気が多い日向地を好む(さいたま市浦和区)。



西洋で改良されたミツマタは、ピンクがかかった優雅な花である(埼玉県川口市)。

[目次に戻る](#)